

人文会ニュース

1990. 6

人文書講座20

南方熊楠と森林保護運動鳥越皓之 1

人文書販売の楽しさ, そして
.....ナカニシヤ書店中西康夫 16

わが愛しの「日刊まるすニュース」
.....鈴木書店井狩春男 24

アメリカの図書館豊田恭子 30

代表幹事退任の辞相田良雄 38

代表幹事をお引き受け
するにあたって菊池明郎 40

58

業務用

良妻賢母論◎女性解放史上の功罪を問う
芳賀 登著 ●2500円

代官所御物書役の日記◎南部藩三戸物語
豊田国夫著 ●1980円

塩の日本史◎雄山閣ブックス②
廣山堯道著 ●2600円

全国・石仏を歩く◎ノンベリ石仏めぐりの旅
庚申懇話会編 ●1980円

古墳時代史◎考古学選書③
石野博信著 ●3000円

雄山閣 *価格は税込

千代田区富士見2/振替東京3-1685

直木孝次郎著

飛鳥

その光と影

万葉の古里。飛鳥のは、古代国家建設の槌音と絶えまない抗争の嘆きの声が交錯する。歴史の舞台である。本書は、悠久の星霜にみがかれて人々を魅了してやまない歴史の舞台を、古代史の碩学が縦横に活写した決定版。四六判、三六頁/定価一八六〇円

典昭和戦前期の日本

伊藤隆監修
百瀬 孝著

戦前期日本の統治組織・議会制度・法制・軍事・行政機構などの実態を分りやすく体系的に記述し、当時の政治・社会を理解する上での基礎知識を提供。菊判・四四頁
定価五八〇〇円

吉川弘文館

定価は税込

113東京都文京区本郷7-2-8・電話03-813-9151

青木書店

渡辺 治◎著

戦後政治史の中の天皇制

天皇と天皇制をめぐる戦後政治45年間を検討し、日本の支配構造を独創的な視点で分析。

¥3000(税別)

坂野 登◎著

無意識の脳心理学

無意識の世界とはなにか? 昼と夜とで左脳と右脳とで異なる無意識の世界。

¥2000(税別)

東京都千代田区神田神保町1-60 ☎03-292-0481

大衆政治の社会学

藤竹 曉著 A5判カバー付 定価5150円

◎政治社会学の書き下し力作◎

“大衆”が政治に登場した20世紀。社会学はどのように把握してきただろうか。有力な社会理論を重点的に跡づけ、大衆と政治のダイナミズムを平明に描く。

◎好評の社会学力作シリーズ

都市祝祭の社会学

松平 誠著 定価6880円

現代都市における祝祭の意味を参加観察により捉え、新たな生活共同の原理を探った注目の書。

都市社会学の源流

秋元律郎著 定価3605円

都市社会学研究の源流に立ち戻りシカゴ・ソシオロジーの問題意識、方法と理論の全体像を示す。

有斐閣

(定価は税込み)

南方熊楠と森林保護運動

— 環境問題を考える —

鳥越 皓之

一 地球規模の環境問題

地球規模の環境問題について、私たちは真剣に考えるようになった。かつて水俣がそうであったような、特定の企業から発生される害悪にたいして企業と住民とが闘うという図式をとっていたときには、それは想像もできないことであった。古河鋳業（足尾銅山鋳毒事件）を、水俣の新日本窒素会社を叩けばすむという時代はすんだのかもしれない。

私たちが一国の規模を越えた大きな問題として、環境

破壊というものをとらえはじめたのは、酸性雨の問題であったような気がする。西ヨーロッパの工業地帯からの酸性雨が北ヨーロッパの森林を枯らし、湖の魚を減少させ、あまつさえ、都市の建築物の表面をボロボロにしはじめたというような記事が新聞などでみられるようになった。そして今、アフリカを中心とした砂漠化の問題、熱帯雨林の急速な減少の問題、フロンなどによるオゾン層破壊の問題、炭酸ガスの増大による温室効果の問題などの難問が続出しつづけている。

さらにはチェルノブイリにみられるように原子炉の事

故は、一国の問題に止まらないことを教えてくれた。たとえば、ポーランドでは毎年七〇万人の新生児が生まれるはずなのに、チェルノブイリ事故以降に生まれた新生児の数は二〇万人で、差引き五〇万人が減少している。「恐怖で産めなかった子供の数が五十万。殺されたわけです」という表現を藤田祐幸はしている。

地球規模の環境問題が私たちに示してくれた大切な事実のひとつは、環境問題は当該地域の個別の問題ではなくて、大きなひろがりをもったシステムとして考える必要のあることであった。地理的ひろがりとしてはまさに「宇宙船地球号」とよばれるように地球という大きな自然系の規模で考え直す必要を私たちに示してくれた。それは地理的ひろがりなので横のシステムとよぼう。それにたいし、同時に重要性をもってうかびあがってくる縦のシステムの問題がある。ここでいう縦のシステムとは、地理的（自然系）システムにたいする社会的深みをもったシステムのことである。さきのチェルノブイリの原子炉の事故のときも被害を拡大させてしまったのは発電所所長を軸とする官僚制機構であることがソヴェエトの内からも外からも繰り返し指摘されたが、このような社会

的システムの課題が意外に根深い問題として環境問題に影をおとしている。

環境問題における社会システムの分析は、いまだ研究の緒にいたばかりである。具体的には、官僚制、企業体、そして化学技術をになう知識集団、住民組織、そしてそれら全体を構造化している権力の問題について、事実をふまえた理解を、いま私たちは、一步一步深めていかなければならないところだろう。

この小稿では、これらの問題の一例として、日本で最初の森林保護運動となった南方熊楠の神社合祀反対運動をとりあげ、そこに介在する学問（科学）、官僚制、住民たち、さらには国家権力のありようを具体的に考えることにしてみたい。神社合祀は明治国家の政策であったから、ここでは国家権力の問題と、官僚制の問題が色濃くでてくるが、筆者としては学問（科学）のはたす役割について焦点をあてたいと思っている。

環境問題を前にしていま学問（科学）は反省期に入っている。私もかつて、『水と人の環境史』（御茶の水書房）で、この科学の問題点について反省的に考えたことがある。ところがこの南方が生きた時代の学問は、学問が学

問として信じられた——学問（科学）のもつ矛盾が露出していない——時代であった。その固い信念が、結果として学問を国家権力とも対峙できる存在とさせていたのである。この『学問の信念』について考えてみたいと思っている。

二 南方熊楠と神社合祀令

南方熊楠という名前は民俗学者のあいだでは知られているが、現在ではひろく一般に知られている名前ではないだろう。しかし明治、大正、昭和戦前期において、在野の人間で、これほど幅広い分野で活躍し、該博な知識で人を驚かした学者は他に例をみない。イギリスの有名な科学雑誌、ネイチャーに五〇篇ほど、日本の雑誌には数百篇の論考と随筆を発表している。植物学者であり、民俗学者ともいわれている。だが、それらの論考がカバーする範囲はもっと広く、また深い。柳田国男が「非凡超凡といふ言葉を、此頃の人はやたら使ひたがるが、何かちつとばかりはた者と変つて居るといふ程度の偉人ならば、むしろ今日は有りふれてゐる時代だといつてもよい。（中略）ところが我が南方先生ばかりは、どここの隅を尋

ねて見ても、是だけが世間並みといふものが、ちよつと搜し出せさうに無いのである。七十何年の一生の殆ど全部が、普通の人の為し得ないことのみを以て構成させられて居る。私などは是を日本人の可能性の極限かとも思ひ、又時としては更にそれよりもなほ一つ向ふかと思ふことさへある」という言い方をしている。現在もっともまゝとって南方熊楠の著作に接せられるのは『南方熊楠全集』（平凡社）である。

南方熊楠は慶応三年（一八六七）に生まれ、一八八七年、二〇歳のときにアメリカに渡り、その後イギリスに移り、大英博物館で八年間、東洋部門の資料整理、調査に従う。イギリス滞在中、「東洋の星座」をはじめいくつかの論考をものにする。時代でいえば、ちょうど夏目漱石の英国留学の年が、南方の英国から日本への帰国の年と一致する。明治三三年の帰国後、二年間和歌山市や紀州の勝浦にいたことを除いて、一生、紀州の田辺を動かず、死ぬまでそこで過ごす。田辺では主に隠花植物の研究をしつつ、民俗学の論文を『太陽』『郷土研究』『民俗』などに発表している。

この田辺で、南方熊楠は明治三〇年代末から四〇年代

にかけての、政府の神社合祀策に対して猛然と反対ののろしをあげる。神社合祀とは、町や村にあるいくつかの神社をひとつに統合することである。南方のこの運動は、神社を統合することによって、廢社になった神社敷地内の神社林が破壊されることへの反対運動であった。神社林であったため、まったく人の手の入っていなかった原生林が伐採されるようになったのである。すなわちこの頃、日本全国で材木需要が高かったので、この神社林が材木業者にねらわれたのである。

ところで、この時期、政府はなにゆえに神社合祀をはじめようとしたのだろうか。その理由は大きく三つ考えられる。ひとつは江戸時代からつづいていた町内や村の範圍をなくして、「近代的な」あたらしい広領域の町や村を政府は形成しようとしていたこと。二つめの理由は神社制度の整備と神官の収入と身分の安定を求める神官たちの要求があったこと。三つめの理由は宗教や道德にたいする政府官僚の見解が想定される。その見解とは、たとえば、その当時の地方局長床次竹二郎はヨーロッパを視察して、いたるところに壮大で荘嚴な寺院建築をみて、日本もこのような文明をもたねばならないと述べて

いる。その床次からすれば、村々に点在する小社はじつになさけないものであったのであろう。このようないくつかの理由がからみあって神社合祀策ができたのである。

三 南方熊楠の森林保護の論点

明治三十九年ごろから一町村に一神社を標準とするようにとの合祀を促す勅令や県令が出される。これにたいする南方熊楠の意見をみてみよう。南方はいう。「この合祀令の末項に、村社一年百二十円以上、無格社六十円以上の常収ある方法を立てて、祭典を全うし、崇敬の実を挙げしむ、とあり。祭典は從來人民好んでこれを全うし、崇敬も大臣が一片の訓令を待たずとも朝夕誠意を尽くしおれり。新定の常収ある方法に至っては、幾年内にこれを立つべしという明文なく、加うるに合祀の処置は、一にこれを府県知事に任せ、知事またこれを、功績の書上（かみあげ）のみに汲々たる郡村長に一任せしなり。地方の官公吏は、なるべく速急に成績を挙げんとて氏子どもに勧めしも、金錢は容易に集まらず。よって一町村一社の制を勵行して、地勢、民情を問わず、なるだけ神社を多く潰すを自

治の美挙と做し、杜格の高下に関せず、最初五百円積まば、千円、次に二千円、三千円と耀り上げ、和歌山県は五千円、大阪府は、六千円まで、基本財産を増加して、さっそく積み立つるように人民に迫り、もって合併を強行し、多くは郡役所、村役場に近き社、もしくは伐るべき樹木少なき社を、一町村一社と定め、由緒、地勢等を一切構わず、諸社を濫りに合併して神林を伐尽くせしむ。よって人民の恐惶迷惑一方ならず、奸人機に乗じて私利を営む者多し」(「神社合祀反対意見」)。

すなわち、ここでは次の二点が指摘されている。一点は神社がある一定の定期定収入があると、人民は祭典を全うし、崇敬の念をあげるといふけれども、人民は大臣

の訓令やお金などがなくとも、つねに誠意をもって祭典などを行っている。二点めは地方の官吏はなるべく多くの神社を潰すのを地方自治体の業績と考えて、役場に近い神社や、伐つてもその木の値打のない神社(それは歴史的にあたらしい神社が多い)をその町村の一社と定めて、他の神社林の多い神社を潰している。潰す方法は順次、神社の常収金額基準をつり上げて、その用意できない神社を合併せようとする方法である。そして潰された神社の神社林の材木の売却から私利を得ようとする者が暗躍している、という指摘である。

一点めの件は伊勢の神官、生川鉄忠が次のような指摘をしていることを南方はさきの引用のすぐ後で紹介して

「脱領域の知」のバイブル、愈々全訳刊行!

西洋思想大事典

Dictionary of the History of Ideas [全5巻]

今世紀最大級の記念碑的出版 Dictionary of the History of Ideasの完訳邦語版。全ての読書人研究者図書館の必読図書です。
本巻10月、別巻10月、刊行予定

●本巻4巻セット
予約特別定価100,000円(6月末迄定価100,000円)7月より
●別巻索引定価15,000円

規範としての文化

文化統合の近代史
谷川稔ほか著 ●定価3,800円

サガのこころ

中世北欧神話の世界へ
ステプリン=カメンスキイ著
菅原邦城訳 ●定価2,480円

カフカ・エッセイ

[カフカをめぐる七つの試み]
三原弟平著 ●定価3,200円

●定価はすべて消費税を含みます。

平凡社 〒102 東京都千代田区
三番町15/振替・東京9-
29639/☎03-265-0455

いる。もっとも、この生川の意見は当時の役人たちや多くの神官たちには受け入れられていない。「従来一社として多少荘厳なりしを、合祀のため、卑陋なる脇立小祠に變じ、つまり十社を一社に減じたるのみ。また大字（旧村、部落）限り行ない来たれる祭典は、張り合ひなしとて全く廃止す。また合祀されたる社の氏子、路遠くて多くの時間を要し、合祀先に参り得ず。わずかに総代のみ詣つれば、合祀の社殿を有する部落の勢い優れるに比して、俘虜のごとく戦々たり。ついに祭日社参せざるに至る。また社地の鬱林老樹は伐り払われ、売りて得たる金は疾く^とに他の方面に流用し去られて、空しく切株を見る」（「神社合祀反対意見」）という状態であつた。

二点めの具体的事例は次のような状態であつた。たとえば「万呂村^{まろ}の天王の社には大葉ヤドリキ多く、中には寄生たるシイノキよりも二倍も長きあり。いずれも秋末に紫褐色の異様の花を開く。小生は山中でこの木多少見しも、ここのごとく年々盛んに花実あるを見しことなし。しかるに、これも俗吏らむちゃくちゃんに、神社の威厳を持つには神林を掃除すべしと厳命し、さなきだに、落枝、枯葉を盗み焚料としたき愚夫ども、得たりかしこし官の

御説^{ごせつ}なりとて、神林という神林へは、ことごとく押しかけ、落葉をかき取り土を減らし、また小さき鋸を持ち行き、少々ずつ樹木を挽き傷つけ、秋枯木となりかかると、たちまち枯損の徴ありとてこれを伐り去るなり」（「松村任三宛て書簡」）

この神社合祀は原生林としての神社林の破壊を意味したが、神社の喪失はまた同時にその地域社会での人間たちの生活の崩壊を導くものであつた。南方は書簡でいう。「三十社四十社を一社にあつめ、ことごとくその神林を伐りたる所多く、また、今も盛んに伐り尽しおり、人民小児の名づけ等に神社へ詣るに、往復五里、はなはだしきは十里を歩まねばならず、染物屋（祭りの幟）、果物屋、果子小売等、細民「で」神社にて生を営みしもの、みな業を失い、加うるにもと官公吏たりし人、他県より大商巨富を誘い来たり、訴訟して打ち勝ち、到る処山林を濫伐し、規則を顧みず、徑三、四寸の木をすら伐り残さず。多数無頼の人足、村落に充満し、喧嘩、争鬭、野中村でのみ昨年中に人の妻娘失踪せしもの八人あり。さて木乱伐しおわり、その人々去るあとは戦争後のごとく、村に木もなく、神森もなく、何

もなく、ただただ荒れ果つるのみに有之。^{これあり}紀州至る処、山林という山林、多くはこの伝にて荒されおり候。もとより跡へ木を植えつくる備えもなければ、跡地にススキ、チガヤ等を生ずるのみ。牛羊を牧することすら成らず。土石崩壊、年々風災洪水の害聞^{がいぶん}至らざるなく、実に多事多患の地と相成りおり申し候。この他、地方官公吏自分の位置を継続せんとて、入りもせぬ工事を起こし、村民を苦しめ、入らぬ所にトンネルを通じ、車道を作ること止まず。さてその工事成るころは、すでに他にそれよりよき工事でき上がるため、せっかくの骨折しも徒勞となり、いたずらに植物の絶滅、岩石の崩壊を見るのみ。慨歎の至りに御座候」(松村任三宛て書簡)

ここで南方は再々度、見識のない地方官僚の問題を取り上げる。南方はいつている。「地方官公吏自分の位置を継続せんとて、入りもせぬ工事を起こし、村民を苦しめ、入らぬ所にトンネルを通じ、車道を作ること止まず」。これは予算をつけることで自分たちの勢力を得るという官僚機構の性格に由来している。すなわち、入りもしない土木工事の予算をとり、予算をとったかぎり、

途中で不必要と感ずても必ずその予算を使い果たすという官僚機構の問題である。つまり、使い果たさないと、担当者の責任になるし、次年度の土木予算が減らされ、それはその部署の人員減につながるのである。

もう一点、南方の先の指摘、地方下級官僚が上司にたいする覚えをよくしようとして、やみくもに、合記をしようとしたこと、それも順次、命令が下に行くほど、その命令の本来の意図が失われて、現象のみを追うようになるという指摘がある。この現象とは、国家における神社信仰の位置づけからではなく、たんに合記をすればよいということである。その現象を追う理由は南方の表現をかりれば、俗吏の無知・私欲によるといふ。これは次に紹介する書簡にもでてくる。

それでは、南方は森林そのものにたいし、どのような考え方をもっていたのであろうか。それは次の書簡で推察できる。この書簡に「エコロギー」という用語が使用されているが、おそらく、南方はエコロジー・システムとして森林をとらえようとした日本での最初の人であらう。

『『和歌山新報』報するところによれば、野中王子、近露春日社の神林は一部保存、一部伐採を許さるる趣

きに有之。しかるに、この二社の神林は、今日、本宮街道にただ二のみ残存せる史蹟の名林に有之、本邦希有の老大杉の外に、辛夷（こし）その他世に稀（まれ）なる古木多く、例えば、目通り周囲七尺九寸のコバンモチのごときは、単にその例少なき大木なるのみならず、従来九州地方にのみ産すと知られたるこの木が、紀州にまで分布しておりしを証する生物分布学上の顯著なる標本に有之候。コバンモチと同属のホルトノキと申すは、これまた九州辺に多きも本島「本州」には紀州の外になかりしが、神社合祀の結果、小生知るところにては、紀州にも今日は見るを得ざること成り申し候。

二社の神林いかに珍奇の古木に富むかは、本書とともに差し上げ候本月十七日の『牟婁新報』切り抜きにて御覧下されたく、この外に、これらの古木に種々雑多の寄生植物、託生植物あり。いずれも熊野植物の精華を萃（あ）めたるものに御座候。御承知のごとく、殖産用に栽培せる森林と異り、千百年來斧斤を入れざりし神林は、諸草木相互の關係はなはだ密接錯雑致し、近ごろはエコロギーと申し、この相互の關係を研究する特種専門の學問さえ出で來たりおることに御座候。しか

るを、今無智私慾の徒が、單に伐採既得權云々を口実とし、是非に、かかる希觀の神林を、一部分なりとも伐り去らんとするは、内外學者に取りても、史蹟名地のためにも、はなはだ惜しまるることに有之。よつて未見の師友白井「光太郎」博士に頼み、このことについて、本月十四日、華族會館發會の史蹟名勝天然記念物保存會評議員會席上、井上神社局長に質問してもらひしに、局長の返事は、本書に添えて差し上げ候『牟婁新報』切抜きのごとく、神林を伐りて神社基本金を作することは絶対に相成らずのことに有之候。しかるところ、本月十八日、当田辺町開催、神職講習會閉會の節、本県神職取締り紀俊氏の講説には、神社と神林は全く別の物なり、神社を存すべき基本金のためには、神林を伐るも何の不可あらんや、との言に有之候。從來神社に関する官省の本意は、ややもすれば田舎の町村に布達されず、村吏、神職等相率いて好をなすこと絶えず。

例えば、当田辺町關鷄社司小川勝門は、氏子総代秋山徳隣を語らい、社の後丘クラガリ山を、くらがりにするほど盛茂せる大樟樹を、何の損処もなきに枯損木

と詐称し、郡吏その場に臨みしも、その言のままにこれを枯損木として、伐採せしめたり」(川村竹治宛て書簡)。

南方の切齒扼腕ぶりが想定できる文章である。

四 森林保全と南方の考え方の位置

では、珍しい植物の保全、エコ・システムの保全の面から原生林保全をとる南方の主張は、現在の森林保全のなかにどう位置づけられるのであろうか。

しばしば日本の森林には、人の手の加わっていない純粹の原生林はないと指摘されている。すなわち、どんな山奥にいても、そこにもなんらかの程度人間からの影響があるというのである。その指摘は正しいであろう。

現在私たちが目にする森林の多くは、人の手が大きく入ったものである。私たちは森林が美しいというが、日本の森林は本来松林に覆われるはずはなく、ほとんどの地域においては照葉樹や落葉広葉樹が森林を覆うのが本来の姿である。

つまり、日本の森林の多くは、伝統的には放置されていたのではなく、村人によって、利用されつつけてきた

のである。森林のうち、とくにしばしば利用される地域は、奥山と区別して、俗に里山とよばれることが多い。人びとはそこから燃料や田畑のための肥料、山菜などの食料、建材、さらにはたとえば正月のときの門松というような象徴世界での利用物を得るというように、多様なものを得てきたのである。また奥山からはときどき建材や茸を得たり、また專業の「炭焼き」がカシやナラを切りだしたりしていた。これが日本人の生活にとっての山であった。庶民にとって、山は決して観賞用のものではなかったし、たんに科学的な観察のために重要という性格のものでもなかった。この種の生活のために利用されている森林(山)は、決して人びとによって禿山にされることはない。キチンと森林を守ってきたのである。このような山を原生林と区別して自然林とよぶことにしよう。ふつうの日本人にはこの種の山はまさに、「自然」と映ったにちがいないからである。

私は日本の山の中心にこの自然林をおきたい。そして左に人の手の加わらない原生林、右に人工林となる。人工林は植林によるのが典型で、そこに杉やヒノキや、またかつてはカラ松などが植えられた。人工林のばあいは、

みじかい期間に太くなる針葉樹が好まれる。最近この針葉樹林が山崩れとなることが多く問題になっている。これらの木は根が深くないため、大雨のときに山が崩れるのである。

ところで、南方がまもうとした神社林はこの三つの分類のなかに位置づけると、原生林に入る。神社林には伝統的に人は足を踏み入れなかったので、それは里に近く存在する原生林といえよう。明治の神社合併策は日本の原生林を残すという意味では残念なことであった。しかしともあれ、南方らの運動の結果、政府が大正期にいたり、この政策の愚に気がついてこれを中止したことは不幸中の幸いだったといえる。

ただ問題は、環境問題としてみると、必要なのは日本人が伝統的に利用し、また保全を維持してきた自然林で、それがあればよいのであって、あえて原生林を残すことは、なるほど生態学にとって貴重かもしれないが、森林は生態学のために存在するのではないのだから、それほど原生林の保全に意を注がなくてもよいのではないかという疑問の提出がありうるということである。この疑問にたいしては、北海道の知床の原生林保護運動を分

析した北尾邦伸の優れた見識を紹介しておきたい。北尾の意見は、原生林は（学者や住民がしばしば指摘する意味での）希少価値があるから残すのではなく、社会にひとつの基準を提出する基礎的存在として存立するといふのである。すなわち、私たちが、日本の森林を将来的にどうしていこうかと考えるばあいの基準を提供するといふのである。

それになりたいし、南方の意見は北尾と大きく異なる。植物学という学問として貴重だといふのである（南方には「学問は一人の私事にあらず」という学問観がある）。「小生は最初自分が専門の学問上より神社合併に伴ふ神林の濫滅を止めんとて、此反対運動に出た」（吉田幸吉宛て書簡）というように学問が第一であった。それに加えて、神社を軸にして生活を営む人たちにとって、生活上必要だということであった。この二人の意見は根っこで重なるところはあるものの、やはり異なっていることは否定できない。

科学を反省的に見がちな私としては、論理的には北尾に組するところがある。だが、一方でまた、南方のストリートな主張を肯定してしまう。そこには科学が輝いて

いた時代の主張の迫力があるのである。この学問にたいする確固たる信念が、国家権力の神社合祀政策を中止させたという事実は、注目すべきことだ。

五 ふたりの生物学者

政治思想史家の後藤総一郎が、明治近代国家があればど急ピッチに精緻さをもって形成された陰にはある秘密がある。その秘密は明治国家権力の正当性の根源を、天皇制イデオロギーに求めた点にある、と指摘している。

そして神社合祀は明治近代国家が地方常民の精神的領域に踏みこんだものと位置づけている。この後藤の指摘に従えば、南方はまさに明治国家、そしてその象徴的存在である天皇制イデオロギーと対決したといえる。だがこの最後の節では、天皇制イデオロギーをあつかうのではなく、生身の昭和天皇と南方との関係についてエピソード的に述べることにしよう。それは「生物学者」、昭和天皇と「生物学者」南方熊楠の出会いとみなしてもよい。昭和四年六月一日、南方は田辺湾上に浮かぶ神島で昭和天皇を案内したのち、軍艦長門艦上で、生物学について南方というところの「ご進講」をしている。南方は「無

位無官」で、いわゆる公認の権威のある学者ではなかったし、この神社合祀反対もそうであるが、地元でさまざまな「問題」をおこしていたので、天皇の南紀伊への行幸にあたり、その周辺の植物について、案内し説明する役割を南方に決めるについては、さまざまな妨害があった。その妨害を南方一流の方法で防ぎつつ、それでも中止になるのではないかという不安のなかで、はれてこの日、南方のご進講が成立したのである。妨害が失敗した理由は天皇自身が南方を望んだことによるらしい。その事実を海軍大将、加藤寛治からの書信で知り、南方は「申し止めんと謀りしものもありしならんも、なにさま聖旨に出たることゆえ、ついに小生を御召しとなりたる御事と感佩の至りなり」（「吉野幸吉宛て書簡」）と述べている。

この日、夏のけはいをただよわせはじめた田辺湾は、あいにく小雨が海面をたたいていた。手違いもあり、やや時間的な遅れがあったが、正午すぎ、南方は田辺町の水産試験場長飯尾公寿の周到な指揮のもと御用船（じつは蟹とり船、玉丸）に乗って神島に急いだのである。六二歳の南方は、明治三年仕立という「歴史」を経たつ

ぎはぎの入ったフロックコートに身をつつみ、蝶ネクタイという『正装』であった。

一方岸辺では、南方の亡き親友の妹、山田信恵が、お召艦長門が田辺湾上に停泊しているあいだ、雨に打たれながら扇ヶ浜の渚にたたずんで無事を念じつづけた。「むかし欧州中古の騎士が戦争に出で立つ時は、志すところの貴婦人に頼み、外征中の勝利と安泰を祈りもらいしことあり」という先例にもとずき、「一心不乱に念じてくれよ」と南方が御進講の無事の祈願を頼んだからである。

さて、先に神島に上陸している陛下の前で、船頭、網中鶴吉は、海に入り、南方を背負って渚に下ろす。神島で天皇の姿をみて南方が頭を下げると陛下は帽子を脱いで挨拶をされた。そのことを恐縮したと、南方は上村翁宛ての書簡に書いている。そのときの船頭の回想によると「浜へ先生を下ろしたら、南方先生がピョコンとあいさつをされ、陛下も頭を下げられた。南方先生が何回もピョコンと挨拶をされると陛下もそのたびに、ピョコン、ピョコンと頭を下げられた」のである。

無人島であるこの神島は、この年より二〇年前、この

島の小社が合祀されることになり、その結果として立木いっさいを売り払い、伐木される危機のあったときに、南方が奔走し、保存に成功した島であった。そこはワンジュという蔓性の植物や、この島にしか見られない植物などが繁茂していた。ところが今回、天皇陛下がこの島の低い山に御登臨されるので、木を伐って道をつくろうという計画が地元からもちあがる。しかしこれも天皇陛下が「先年いづれかへ御行幸のときに、吏員等が草をきり開き材木を除きしため、学問上の御興味をつぶし、大いに御不快なりし由にて、決して道路など切り開くに及ばずとの返牒に接しその返牒を新聞に載せ候より、神島だけは道路を作るに及ばず、また無用の掃除などするに及ばずということになり、村民も大いに助かり申し候」という経緯で、立ち消えとなった。

神島案内後、午後五時半からお召艦長門艦上において南方は粘菌や白浜のクモやヤドカリについて説明を三分ほど行い、御進講は無事終了した。熊楠の夫人、松枝に「私の今までの苦勞も決して無駄ではなかった」といわせたほど、このご進講は南方やその周辺の人たちにとっては一大会事であった。

それからちょうど一年後、神島にこれを記念して南方自作の歌碑が建てられた。

一枝も心して吹け沖つ風

わが天皇のめてましし森ぞ

そして、さらに三三年後の昭和三七年五月、そのときすでに南方は亡くなっていたが、天皇はふたたび、南紀を行幸している。そして次のような歌をつくった。

雨にけふる神島を見て紀伊の国の

生みし南方熊楠を想う

天皇にとって、三三年前の同じ雨の日の、「生物学者」南方の印象が深かったのであろう。

あの日、天皇陛下がビョコン、ビョコンと頭を下げたのは、ひとりの「生物学者」がひとりの「生物学者」にたいしてであったのではないか。生物学者、南方は、生物学という学問を信じることによって、国家権力や、官僚制や、私利私欲の連中から森林を守りきれたというところがある。これは学問が人の役にたつということが十分に信じられていた時代の、学問が国家権力や私利私欲の連中をねじふせた事例である。

本稿の参照文献

藤田祐幸他「反原発・ライフスタイルからの運動」『新日本文学』一九八八年一月。

柳田国男「南方熊楠」『定本柳田国男』筑摩書房、一九七〇年、四三三頁。

『南方熊楠全集』平凡社、一九七一年。

北尾邦伸「森林化社会の社会学」、内山節編『森林社会学宣言』有斐閣、一九八九年。

後藤総一郎「南方熊楠と神社会併反対運動」『季刊柳田国男研究』五号、一九七四年。

中瀬喜陽編『南方熊楠書簡——盟友 毛利清雅へ』日本エディタースクール出版部、一九八八年。

稲垣足穂「南方熊楠児（ちこ）談義序」、飯倉照平編『南方熊楠 人と思ひ』平凡社、一九七四年。

鶴見和子『南方熊楠』講談社、一九八一年。

南方文枝「父南方熊楠を語る」日本エディタースクール出版部、一九八一年。

笠井清『南方熊楠』吉川弘文館、一九八五年。

環境問題関連文献

大来佐武郎監修『地球の未来を守るために』（福武書店）

ローマクラブ『成長の限界』（ダイヤモンド社）

庄司光、宮本憲一『日本の公害』（岩波新書）

- 宇井純『公害原論』（亜紀書房）
 神岡浪子『日本の公害史』（世界書院）
 鳥越皓之編『環境問題の社会理論』（御茶の水書房）
 末吉富太郎『環境学への道』（思考社）
 日本環境学会編集委員会編『環境科学への扉』（有斐閣）
 飯島伸子『環境問題と被害者運動』（学文社）
 宇井純他『技術と産業公害』（東京大学出版会）
 宮本憲一『日本の環境政策』（大月書店）
 宮本憲一『環境経済学』（岩波書店）
 華山謙『環境政策を考える』（岩波新書）
 木原啓吉『歴史的環境——保存と再生』（岩波新書）
 人間環境問題研究会編『最近の重要環境公害判例』（有斐閣）
 林迪廣、江頭邦道『歴史的環境権と社会法』（法律文化社）
 都留重人『環境教育——何が規範か』（岩波ブックレット）
 山村恒年『環境アセスメント』（有斐閣）
 筏英之他『環境カタストロフィー』（日刊工業）
 川名英之『ドキュメント日本の公害』（緑風出版）
 ビル・マッキベン『自然の終焉』（河出書房新社）
 槌田劭『共生の時代』（樹心社）
 石広之『地球生態系の危機』（筑摩書房）
 鳥越皓之編『水と人の環境史』（御茶の水書房）
 富山和子『水の文化史』（文芸春秋）
 中西準子『下水道』（朝日新聞社）
 稲場紀久雄『下水道と環境』（朝日新聞社）
- 淡路剛久編『開発と環境』（日本評論社）
 内山節編『森林社会学宣言』（有斐閣）
 石広之『蝕まれる森林』（朝日新聞社）
 黒田洋一他『熱帯林破壊と日本の木材貿易』（築地書館）
 木原啓吉『ナショナル・トラスト』（三省堂）
 本田勝一『知床を考える』（晩聲社）
 安田喜憲『森林の荒廃と文明の盛衰』（思索社）
 谷山鉄郎『恐るべきゴルフ場汚染』（合同出版）
 山下弘文『だれが干潟を守ったか』（農文協）
 野池元基『サンゴの海に生きる』（農文協）
 色川大吉編『水俣の啓示』上下（筑摩書房）
 原田正純『水俣病にまなぶ旅』（日本評論社）
 原田正純『水俣病は終わっていない』（岩波新書）
 田尻宗昭『四日市、死の海と闘う』（岩波新書）
 田尻宗昭『油濁の海』（日本評論社）
 槌田劭『石油と原子力に未来はあるか』（亜紀書房）
 宇沢弘文『自動車の社会的費用』（岩波新書）
 松橋晴俊他『新幹線公害』（有斐閣）
 小田康徳『都市公害の形成』（世界思想社）
 篠原啓一他『ドキュメント大気汚染』（筑摩書房）
 『田中正造選集』（岩波書店）
 溝入茂『ごみの百年史』（学芸書林）
 宝月誠編『薬害の社会学』（世界思想社）
 アスベスト問題研究会『アスベスト対策をどうするか』（日

本評論社

泉邦彦『恐るべきフロンガス汚染』（合同出版）

樋口健二写真集『毒ガス島』（三一書房）

坂田俊文『地球汚染を解説する』（情報センター出版部）

村井吉敬『エビと日本人』（岩波新書）

高木仁三郎『巨大事故の時代』（弘文堂）

A・トウレーヌ他『反原子力運動の社会学』（新泉社）

藤田祐幸『ポスト・チェルノブイリを生きるために』（御茶

の水書房）

広瀬隆『原発がとまった日』（ダイヤモンド社）

石田忠『反原発』（未来社）

樋口健二『原爆被曝列島』（三一書房）

北村博司『芦原原発はいま』（現代書館）

ハロルド・ウィレンズ『核をやめさせる力』（創元社）

市川富士夫他『地球をまわる放射能』（創元社）

室田武『原子力の経済学』（日本評論社）

八木正編『原発は差別で動く』（明石書房）

田中三彦『原発はなぜ危険か』（岩波新書）

三輪妙子他『原発をとめる女たち』（社会思想社）

伊藤良徳『原発暴走事故』（三一書房）

鳥越皓之（とりこえ・ひろゆき）

一九四四年生まれ。関西学院大学社会学部教授、社会学、民俗学専攻。著書に『トカラ列島社会の研究』（御茶の水書房）、『家と村の社会学』（世界思想社）、『沖縄

ハワイ移民「世の記録」（中公新書）。編著に『水と人の環境史』（御茶の水書房）、『環境問題の社会理論』（御茶の水書房）、『民俗学を学ぶ人のために』（世界思想社）などがある。

人文書販売の楽しさ、そして……

ナカニシヤ書店 中西康夫

書店の閉店

昨年末、ナカニシヤの京大前店を閉店しました。このことは一般紙や業界紙などで幾度もとり上げられ、その反響の大きさに我ながらこんなことであったのかと迷惑と思う反面、全く驚いた次第です。

顧みますに私どものような小書店の閉店が話題を提供すること自体、いわゆる専門書の不振が皆さんの心の底に沈殿していたわだかまりを掻きまぜたものと思うのです。どの規模の書店もオープン時の気構えはその各書店の屋号で拝見する如く、「一つの文化を地域に」といっ

た気概でスタートされるものと思われます。しかし、いくばくもなく周囲の情勢利あらずと、雑誌を中心とした軽い、足の速い分野へと転進していかれる方が多いのが現状です。悲しいことですが、これが現在の書店の有りようであり、生き延びようであろうと思います。

私は立地的にも転向が利かず、又、幸か不幸か京都大学という大市場が目の前にあったがため、専門書の販売にこだわって一筋にのめり込んでいった訳です。昭和三十年代から四十年代へかけて、まだ専門書がよく売れていた時代、経営は順調で従業員も二十人余り、その頃、

出版部も併設致しました。その出版は今独立して、立派に一人歩きをして居りますが、本体の書店がその後低迷を余儀なくされて参りました。

今回も「京大生でも本ばなれ」とか「専門書店の不振」とか、いろいろ書かれましたが、そんな簡単なものではありません。京大には未だに「本の好きな人」、「良い本を理解できる学生」が沢山いて、現実にもとても良い本はよく売れていました。学生協も専門書店ですが、値引きがあるとは言え隆盛を極めて居ります。これが私の店をとりまく、最近の傾向でありました。

大学納入業者の苦悩

それでは何が専門書中心の書店経営に重くのしかかって来たかと言うと、それは「丸善さんの伝統」以来、大学への納入業者の業務として、一般書店の皆さんや版元の方々には想像して貰えない程、その面倒を見さされていたということです。先生方へのツケがたまるとかいいう生易しいことではなくて、(事実今度の閉店で個人の先生方は殆ど全員がお支払いをして下さいました)図書館や研究室などへの納本に際しての労力、特にその事務量

の多さと完全さを要求されるプレッシャー、そして代金回収の遅さは想像に絶します。中には全く先方の人事移動やミスのため、納本したはずの本が行方不明になり、お支払い預けない場合もあります。それに耐えて、納入書店は分をわきまえ営々と納本を続けて、専門書の販売をしている訳です。

いつも思っていた事ですが、経営的なこと、強いて言えば取次への支払い問題などを一切考えないで、専門書を納入して売ろうとすれば、今までの二倍から三倍は売れたであろうと思います。それだけの需要はあるのです。しかし、資金面でついていけないため、適当なところで切上げて、深追いをしないという戦略をとらざるを得ません。これは大小の納入書店を問わず言えることで、人件費の問題や、取次からの専門書の請求方法(月二回即請求・即払い)などに配慮が見られれば、更に専門書の売上げは延びるでしょう。言いかえると、専門書販売で納入書店は自衛上、適度にサポーターージュをしている訳です。取次のなかには、「そんないいかげんな相手には本を売るな」とか「今の時代にそんなことを」とか言う人も居りますが……。

人文書とは

人文書との出会いについて経験して来たことを私なりに申しますと、私は人文書というものは一般書の延長線上にあるもので、社会科学書や理工・医学書のような専門書ではないと思っています。なぜなら、買い求められる読書人は人文書を教養書の一環として見ておられ、その知的興味を満足させ、さらに広げようとして選択されていることがよく理解できます。例えば、法律の本や理工学の本などは、その中のぜひ必要な一節を自分のものにすればよいという利用方法がありますが、人文書にはそれがありません。小説のように、全部読み通すことが一つの論理の完結となります。

ここに人文書を扱う書店の面白さがあるのです。どのような著者のどの理論を引き出して、店頭で目立たせて、読者に提供するか、これは非常に楽しいことです。話はそれますが、私は大型店で人文書が一般書から遠く陳列されていて、社会科学書が一般書の近くにあつたりすると、惜しいなあと思うのです。

人文書が一般書に近い一つの傾向として、流行の問題があります。ある時期、その著者の本は異常な程の売行

きを示すと思えば、だんだん下火になって最近はまだ売れないとか、新しい著者の本が爆発的に売れることがあるとか、一般の小説類に似た動きをすることがしばしばあります。人文書はその様な動きを速やかに察知し、店頭陳列すること、強いて言えば、その情報をいかにキャッチするかで、その店の人文書の売場が決ります。

人文書の情報

私は京大へ殆ど毎日何らかの用件で行っておりました。そして、新聞の書評などをよく引受けておられる、その様な動きに鋭い先生のところなどになるべく出入りし、しばらく雑談をしていますと、いろいろ話題が出て来て、結構ヒント以上の知識を得られたものです。例えば「浅田彰という若い人がいて、彼が本を書いたら相当反響を呼ぶだろう」という様なことを、あの『構造と力』が出る一年程前から聞いていました。そして、一方、版元の方とも親しくしていますと、その本が何時どこから出るかというニュースも入って来ます。事前に注文をしておいて、それが売れた時は本当に嬉しいものです。

その様に著者に近い先生、版元さんと特に親しくして

中西康夫さんを慰労する会



本年2月27日に開催された「慰労する会」にて。

前列右より3人目が中西氏（写真：弘報委員会）

預けたことは、まことに有難いことでした。一つ付け加えますと、取次サイドからはこういうニュースは皆無といていい程入って来ません。仕事の性質上仕方ないと言えそうですが、以前はそういうことにたけた取次人も居られたのと思うと残念でもあります。取次さんとの本の話は、大抵、雑誌カベストセラーのことで、こちらもそれ以上はしません。私は版元の訪問者が勉強の先生でした。

大学の先生というのは、やはり読書に関して一家言を持って居られる方が多くて、非常に教えられます。私は出入りする学生達にもなるべく先生方の研究室を訪問するよう奨めました。それが学生生活の特権であり、よい読書人が育つと思ったからです。私は夜飲みに出る所も先生方の出入りの多い飲み屋に足を運ぶようにして、いろいろな分野の専門の先生と親しくさせて頂きました。ここでは文系理系を問わず自分の専門の書物の話はあまり出ません。広く言って人文系統の話が殆どで、教えられヒントを得ました。

昭和三十年代から四十年代のはじめにかけて、専門書指向の書店でもまだ人文書には力を入れる店が少なかっ

た頃、私の店では人文書のスペースを大きくとり、その頃は本当によく売れました。四十年代半ば学園紛争を境に、哲学関係を中心に人文書の思想ものが、店頭をにぎわす書店が増えて来ました。特に京都の書店は、店の個性を出すのが好きで、人文書を重点にされる店もあり、私の店の特色もあちこちにある並になってしまったのは残念でもあり、嬉しいことでもありました。

大学教科書販売あれこれ

私の店は京都大学とともに歩んで来たようなものです。正確には戦前の旧制三高から始って戦中に企業統合や、戦後へかけての書物不足の時代を、ずっと京大などの教科書を扱って来ました。教科書は最近いくら売行きが落ちたとはいえ、やはりお客即ち学生さんを店へ足を運ばすことでは、これに勝るものはありません。戦後の学生協全盛となった今まで、店を持ちこたえられたのは、教科書特に教養課程のものを殆ど扱って来られたからです。毎年新学期前にテキストの打合わせに上京しますと、「書店として教科書をよくとって、頑張っておられますね。今はもう全国的には生協に変わってしまいました。」

という声を版元からよく聞きました。事実今まであまり負けずにテキストのシェアを保って来られたのには、私なりに相当の努力をした積りです。コツと言えば、教科書を決められる先生方の懐まで入って協力すること、それから、販売には絶対的に正確を期し、努力することに盡きると思います。テキストを決める先生方に不安を与えては、知らぬ間にテキストは逃げて行きます。本年も閉店しているのに、「ドイツ語はどうしてもナカニシヤでテキスト販売をやれ」とドイツ語教室から言われて扱うことになったのも、今まで一度も誤販売をやらず、品切れ連絡、献本の確保・処理などを、授業優先でやってきたからに外なりません。

教科書は一時に一〇〇〇円から三〇〇〇円のもの何十・何百冊と売れるのですから、店頭でベストセラーが三十冊売れたとか言っているのとは額が違いますし、労力も少なくて済みます。そんな効率的な販売に力を入れるのを惜しんで、離れて行った書店や、信頼されていない一部の生協さんには考え直して欲しいと思います。売切れになっても追加注文もしないとか、誤って仕入れたテキストを使ってくれと言った生協があったとかいう話

を聞きますが、全く考えられないことです。

私の店と京大生協は永い間競争関係にありましたが、両者共、本当によく勉強して頑張ったものと思います。前に述べたような緻密さといった点では、京大生協さんは抜きんでトップランクの生協でしょう。私の方は今回降りましたが、今後とも今まで以上に京大のため、頑張っ

てほしいと思います。

テキストは戦中・戦後と物資不足などで、非常に確保しにくい時期がありました。私の方では、その時から得た信用を今まで引張って来ました。大学紛争などのやりにくい頃にも、先生方や教務課などと連絡を密につみ重ねて来たことが、今日のテキスト販売につながったことを思うと、大変なことだったと振り返っています。

人文書は教科書や参考書に推薦される本を沢山含んでいる分野ですから、直接購買者への販売に携わる方も、又、版元さんも連絡や記録を密に協力をしていって下さい。学校によっていろいろな特殊性がありますが、意外に版元さんは情報不足で無理解な方があったように思っていました。重ねて申しますが、テキスト程簡単に部数が延びて売れるものはないということを忘れないでくだ

さい。

閉店してがっかりした事

閉店して始めて判ったことがあります。私の店は学校・先生への出入りが多かった関係上、幅広く相当な種類と量の定期物を持っていました。しかし、今回閉店のご通知をして、最寄りの書店又は生協で継続して頂くよう、何度もお願いをしたのですが、最近判明したところでは、購読者個人のもの・図書館や研究室のものすべてに互って、約七割まで、どこにも引き継ぎの定期予約をなさっていません。雑誌・書籍共です。こんなものかと思いましたが、又、大変なことになったと思っています。若しこのまま放置しますと、欠本に気付かれた時には不揃いの事態が生じかねません。大げさに言えば業界の売上減でもあります。中には特別に購買者が少ない専門分野の全集もありますから、版元もお困りになるでしょう。取次さんは打つ手がないからと、私の方にある定期台帳を見にも来られません。いつも売上を追いかけている取次さんにしては欲のない話ですが、書籍が雑誌に較べて手数がかかるという潜在意識があり、面倒なのではないか

と思っています。定期物は返品もゼロですのに。

こんな物かと言ったのは読者も読者なら、売り手も売り手といった感じだからです。一段落したら、私の方からどうされたかというリストを、読者別に出さねばならないのではとも考えています。雑誌・全集などを長期間とってられる側は、随性でそんなものだという話を、最近一部の先生方から聞きました。一生懸命に取組んでいた定期物の配達・正確を期すための努力は一体、何のためにしていたのでしょうか。書店を閉めてもこんなことを言ってと笑われるかも知れませんね。

パターン配本

指定配本の版元さんの場合は別ですが、一般的に専門書の配本パターンは不適切で、売れ先きを逃し、返品を激増させています。昔、人間が配本をしていた頃、私の店には京大関係の先生方の著者で売れそうなのは、沢山来ました。逆にあきらかに他大学のテキストと思われる本は、ほんの一、二冊でした。しかし、今は同分野の本は何でも同数です。売り損じも生じる反面、不要のための返品に追われます。いわゆる専門書というのは適材適

所といえますか、所を得なければ全く無駄ということの認識のない方が業界には多いようです。この弊害が取次も版元も新刊配本を絞る方向に向かわせていますし、大きな売り損じを生じさせています。詳しい先生方に聞きますと、そんな風にコンピュータを使うのは間違っているし、パターンの数も極端に少な過ぎると言われます。しかし、一向に改められもせず、皆が諦めムードになっているのは、業界として恐ろしいことです。

一方では書店のSA化など、盛んに云われていますが、もっと元に戻りがあることを、業界として取組むべきです。今回の消費税問題もそうですが、業界の一部の見解だけで全体の事柄が進められすぎ、批判の声の集合しない業界は、併立するより分解（わかれるという意味）する方がよいと思います。お互いに先が見えて発展するのではないでしょう。今時まだ、消費税関係でゴタゴタしている業界も珍しいのですが、もっと根本的に大きな問題を抱えていることを、危機として捉え、この状況を打開しなければいけないところへ来ていると思うのです。私は雑誌と書籍という、本質的に異質のものが同居し、同列に扱われるというシステムは、お互い利益のないこ

とで、販売上も取引上も早く別歩きをして欲しいと願っています。例えば医学書にみられる如く（客注品が三日程で書店まで来る）、分野別の専門書の販売システムができれば、客注品の遅延の解消になるのではないか、というようなことです。専門書の流通だけに限っても、是非、一大改革が必要であり、望まれるところです。

今の取次にそれを求めるのは無理でしょうか。



わが愛しの「日刊まるすニュース」

(株) 鈴木書店仕入部 井狩 春男

☆「まるすニュース」が、日刊になったのは、ボクにとつてはるか遠い昔の七年前だった。

月刊で一〇年は長かった。なに分にも、一人の書店人を除いて、ほとんどの人が見向きもしなかったのだ。たった8頁の小冊子、活字を組んで、やっと出せる頃にはもうニュースは古く、役に立たなかった。役に立たないことを知っていながら出さなければならないのは、ほんとうに辛かった。

経費もかかるし、読んでもらえないのなら、もういいかげんに辞めようではないか、と会社から言われ、ホッ

と肩の荷を降ろしたのが、出し始めてから二二〇ヶ月経った春の日だった。ちょうど十年である。

代わりに出すことになったのが、「日刊まるすニュース」である。最初、日刊で続くかどうかを一週間考えた。同時に、一週間テスト版を書いてみた。すべからず、途中でやめるのを恥思っていた。出す以上は絶対に続ける！と覚悟していた。が、案外簡単にできることが分かった。今でも「日刊というのは大変ですねえ」とよく言われる。いや、いや、そんなことはない。気が楽である。第一、ニュースを死なさずに済む。今日入ってきた

ニュースを、明日の朝は書店さんに届けられる。月刊や週刊だと、こうはいかない。最初の方のニュースは、もう古くて使えない場合が出てきてしまう。

日刊は、クール宅急便のようなものだ。新鮮な状態で、長距離でも受け取り手に届く。B5版の片面の一枚だから、緊急な場合のFAXも楽である。

楽な点はまだまだある。月刊や週刊と違って、編集しなくても済む。レイアウトを考え、活字を指定したり、巻頭に何を持ってこようかなど考えずに済む。また、ぶつけ本番の手書きであるから、校成などの必要がない。さらに、少々言い回しがおかしかったりしても、活字と違って手書きだと許される範囲が広い。(と、本人は思っている)

手書きは、実に自由である。字の大きさ、太さなど思いのままである。ヘタなイラストだって入れられる。

受け取り手に、当初こちらの方で意図しなかったことを言われたりもした。スナワチ、活字と違って手書きは、書く人の人格が現れて、暖かみがある、と。活字より読みやすい。あるいは、読む気が起ころ、と。

ニュースの速いこと、それは日刊であるから当然前で

ある。

てな訳で、日刊の「まるすニュース」は帆に風を孕み、港から大海に出ていったのである。

☆一年ほど経った時であろいか、或る優れた編集者の目に「まるすニュース」がとまった。後で知ったのだが、その時は、誰か本好きが個人で愉しんで作っていて、友達などに読ませているのだと思ったそうなのだ。まさか、会社として出していて、書店さんに配っているなどとは夢にも思わなかった、とも。

今では、なんとも言えるが、そのころ小生は正にそういう個人紙のような「まるすニュース」を書店さんに届けようと思っていたのだ。書店さんに読んでもらえなければ情報は伝わらない。毎日読んでいただくには、オモシロクなければならぬ。それだけでなく、印象に残る書き方を必要とする。論文はいらない。誰が朝から堅苦しい文章など読みたがるものか。できれば、笑えたり、一日の始まりが明るくなるような書き方がいい。食事に喩えれば、新鮮な材料を使い、毎日食べても飽きのこない味つけで、適当に栄養があって、見た目もよく、

※ 本日より、毎日（日曜・祭日を除く）
ニュースをお届けします。

日刊

まるす

ニュース

株式会社 鈴木書店

58 年 4 月 5 日 (火)

No
1

※ 平凡社の『世界大百科事典』巻数構成変更、定価改定

※ スタндарт版のみ。デラックス、115%は現行通り。

・巻数が一巻増え、全37巻になります。

(36巻、百科データブックが、増えます。

又、33巻は、五音索引のほか、分野別索引が増えます。)

・定価は1万5千円より、208,000円になります。

・発売日は、58年5月上旬予定です。

※ 現代評論社の雑誌『現代の眼』は、今月に
出る5月号をもって休刊になります。

※ 新刊情報……

・以文社『リリイ全集』全9巻

第一回 4月 7巻<散文II> マルチの手記 小文庫、二つのアラハ物語 5800円

・リアポート『エゴン・シーレ画集』

5/10 15,000円 学生でも買える上掲の定価、6社が出

・東経『日・本・人・語』 4/25 880円

見本は4/18。新刊申込を次山頂しています。ご希望数通

りお届け出来ると思います。6/6月の予定

・中公『Canned Music 100』田中康夫、1200円

・晩聲社『破局』斎藤茂男、4/21 1300円

②企画『斎藤茂男フェア』は、おかげさまで、大変良く売

れています。『破局』は、フェアの追加として、送らせて

頂きます。

ハ
ン
ド
を
加
え
て
お
届
け
し
ま
す

2回は
10月

ている
『リリイ画集』
のペン
シャープ
は、各3500
円です。

「日刊まるすニュース」第1号

簡単に済ますことができる、そんな朝食である。

☆航海は順調だった。ほとんどトラブルが無かった。それどころか、いくつかの大洋を渡る度に、発行人の予想もしなかった所で、あるいは、検討もつかない所で「まるすニュース」は読まれ、話題になり人気は拡まっていた。

最近、地方の書店さんを訪れた出版社の営業の方に聞いた話だと、「情報をなにかから仕入れていますか？」と尋ねると、「新文化とまるすニュース」と答えた書店さんが多かったそうである。これは、誠にありがたい話であった。と同時に少し寂しい気もした。「新文化」は、優れた業界紙であるから異論はないとして、「まるすニュース」は、講談社、小学館、新潮社といった大出版社のニュースが載ることのない情報紙である。せめて、もう一誌（紙）そういった大きな欠点を補ってくれる情報誌（紙）を挙げて欲しかった。「まるすニュース」だけでは荷が重すぎる。

☆地方で書店さん同志の集まりがある時に、情報として、

「まるすニュース」を読みたい、という話が出ることを聞いている。鈴木書店は、小さな取次であるから、そういった席にお集まりの書店さん全部とお取引がないこともある。せっかく、出版社から頂いた貴重な情報である。お取引がなくなるとも、「まるすニュース」はお読みいただきたいと思うのだが、それはあくまでも個人的な、ニュースの書き手としての心情であって、会社としては、隣のお得意さんと同じ情報を差し上げるわけにはいかないことになる。

☆「まるすニュース」を、マスコミが読んでいる、と聞かされた時、若者のように「ウッソー」と言ってしまったものであった。ところが、それを裏づける事実が起きってしまった。

或る版元さんが、新聞に取り上げてもらいたいのので、最初に「まるすニュース」に流す、と訳のわからないことを言ってきたのである。

だったら、新聞社に直接出かけては？と言うと、持ち込みは沢山あるからね、めだたないのオ。それより「まるすニュース」が一番先に取り上げてくれると、書店さ

んの方から仲のいい新聞社に情報が伝わるのよ。新聞社は、読者と接している書店さんの情報を重視するんだな、これが……、と笑うのだった。

「まるすニュース」で流したその日、各社から取材の申し込みが出版社に入った。

小生は、書店さんの影響力の強さを今さらのように知ったものだった。

☆名古屋の或る書店さんでは、「まるすニュース」に載った本は、全部仕入れて店頭に揃えておくようにと、店長が指令を出している。

一年間、統計を取ったそうなのだ。「まるすニュース」で紹介された本が、売れるかどうかを——。結果は良かった。「まるすニュース」に載った本は、書評に出る率が高くて、したがって良く売れる、と出たのだ。だから、全部仕入れるということなのだ。

「まるすニュース」に何を載せるかは、たった一人の担当者である小生に任されている。——どうです、会社のこの心の広さ！

選ぶ基準は、売れる本であるかどうか、である。良い

本は売れる。また、売れる本は良い本である。売れなかったのに良い本とは言えない。例えば、三千部作った本があったとして、数冊しか売れなかった、つまり、数人の読者の手にしか本が届かなかったとする。三千部近い返品、山の山を前にして、良い本なのに、出すのが早すぎた、などとは言っても始まらない。読まない本が、良い本になりようがないではないか。その本を必要とする読者に届き、読まれて、血となり、肉となり、魂となって初めて良い本、と言える。つまり、売れる本である。この場合、部数の多少は関係がない。一〇〇〇人しか読者のいない本は、その全員に届く（売れる）条件を持っていれば、「売れる」と判断する。それは、良い本となり得る。

問題は、ナン万部、ナン十万部、間違ってミリオンセラーになっちゃうような本の、最初の段階での見極め方である。

方法は至って簡単だ。自分なら読もうと思うかどうか？ 出たら、必ず買おう！ と考えるかどうか？ 企画書なり現物なりを見た時に、「ワー、オモシロイ！」と、ゾクゾクするかどうかだと思う。

これは料理に似ている。好き嫌いはあるとして、一人がその料理をオイシイと思えば、他の人達も同じようにオイシク感じるだろう。一人がオモシロイ！と嬉こべる本は、同じようにオモシロイと思う人が多勢いるはずである。天才、奇人、変人、凡人などいたとしても、同じ人間である。感情や思考にそんなに差はないと思う。

売れる本かどうかの判断は、自分である。どれだけゾクゾクしたか、それが目の前が急に明るくなるような本で、著者の初めての本で、あるいはノッテル著者の新刊で、力のある出版社から出るとなると、ベストセラーの可能性がある。

「まるすニュース」に載せる場合の基本的な判断の方法である。

☆或る書店さんから聞いた話である。

若い女性が店にやってきて、熱心に本を捜していたのだが、見つからなかったらしく聞かれたという。その時、バッグからどこかで見たことのあるB5判の紙切れを出して、「この本、ありませんか？」と。その紙切れが「まるすニュース」であったことは、お察しの通りである。

書店さんは、オドロイテ聞いてみた。答はいってリントンで、友達が出版社に勤めていて、定期的にコピーをもらっていたのであった。

小生は、この話を聞いて、大満足であった。「まるすニュース」が読者にやっと届いたことが、嬉しかった。或る編集者が言っていたように、個人が趣味で作っているような小新聞が、プロの読者である書店さんに読まれ、さらにその先の読者にまで読まれている。これ以上の望みはない。

☆これからの「まるすニュース」の課題は沢山ある。しかし、ここではそれらを明らかにしない。書いたら実行に移さなければならないではないか。もとより、ものぐさなのである。それより、今のままの「まるすニュース」を愉しんで書いていたい。そう、思うのだ。

アメリカの図書館

アメリカで図書館を勉強しています、と言うと、大抵の日本人からは、それはどういうものですか、と問い返される。

「ええとあの、まずレファレンスと分類学とを学んで、それから収書とか保存とか調査とか……」。しどろもどろに説明することになるが、あまりよく理解してもらえたためしはない。

無理もない。私自身三年前にはこんな学問の存在すらよく知らなかったし、二年半前に渡米した際も、どちらかと言えば書店にばかり目を奪われていて、その一年後

豊田 恭子

には自分の興味が図書館に移り、まさかこの国の大学院で図書館学を勉強することになるうなどは予想にしていなかった。

「本棚がない」

図書館の存在が気になり始めたのは、アメリカ人があまり本を買わないことに気付いてからだった。

アメリカに来てすぐに、私はボストン大学の学生寮に入ったが、そこで最初にとまどったことは、ベットも机もタンスも鏡も家具の全てが備え付けられているその部

屋に、本棚がないことだった。

たいたした読書家でもないくせに、やたらと本を買う習癖のあった私は、これは困る、と即座に思った。最低限手元におきたい、と思って日本から送った本だけでも、小ぶりのダンボール箱に三箱あった。すぐにキャンパス・ショップ（前回書いたBUブックストア）に出向いたが、ここにも、オーディオも冷蔵庫もコンピュータもなんでもあるくせに、本棚がない。店員に聞くと、三段の棚がついた木製の飾り棚を指さし、これに本も置ける、と言う。冗談じゃない。こんなんじやすぐ一杯になる、と思ったが、日本で愛用していた七段のスチール製本棚は、ボストン中を探しても結局見つからなかった。

日本なら、どの書店でもCVSでも立ち読み客で混雑する雑誌売り場が、ここではぽかんと空いている。街の一般書店では、ほとんど専門書売場を期待できない。寮に住む他の学生たちは誰も本を持たず、大学院に籍をおく学生でさえ、部屋に本棚一本だったりする。僕はついつい本を買っちゃって、家じゅう本だらけで……、と普段こぼしていた友人の家にいつぞや訪ねた時も、実は内心、書架の間に埋もれて生活しているような状況を想像

していただけに、私はその本の少なさに（といっても本棚七、八本はあったのだが）少々がっかりした。それが本を読んでいないことを意味していないのは明白だった。

こちらの大学は日本の大学と比べものにならないほど多くの文献を毎回の授業で読んでくるよう指定されるし（そういうことの全くない授業もあるのにはあるが）、件の友人など、古代中国とギリシア哲学のプラクティシズムの違いを語り、谷崎潤一郎とチェーホフの歴史的類似性を分析するといった具合で、古今東西、そのものすごい読書量でいつも私も驚かしている。

彼らを支える図書館の存在に私が気付き始めたのは、渡米して半年以上たってからである。

研究を支える図書館コレクション

たとえばある授業で、テキスト五冊、サブ・リーディング二〇件が指定されたとする。学生はメイン・テキストの一、二冊を買うか買わないかで、あとは図書館を利用する。図書館ではテキストをリザーブ・ブックと呼び、大量に揃え、館内閲覧のみ。ひっきりょう、学生は図書館

に通いつめ、そこで指定文献を読み、ノートをとることになる（自分で買ったテキストも、学期が終われば売ってしまう）。

調査やレポート書きも、図書館なしには成り立たない。

図書館には各種インデックス（雑誌記事索引）が揃っていて、自分の調べたい項目をひけば、そのテーマを扱った雑誌記事、論文、ものによっては書籍もリストアップされてくる。

雑誌記事索引というと、私の拙い記憶では大宅文庫の手書きカードぐらいしか日本では思い浮かばないのだが、アメリカのインデックスの発達は、これだけでも特筆に値する。

最も古く、かつ一般的な「リーダーズ・ガイド」がポピュラーな（といってもここには「パブリッシャーズ・ウィークリー」といった各分野の代表的専門誌が含まれている）雑誌一〇〇誌をインデックスし始めたのが、なんと一九〇五年（その後拡充して現在一八五誌）。出版の項目をひけば、各年度で、どここの雑誌にどういう出版関係の記事が載ったのか、一目瞭然に判る。

化学、工学、建築、ビジネス、政治、経済、社会学、

心理学、歴史、音楽……、とにかくどの学問分野にも、今ではその分野の主要誌をカバーする専門インデックス誌があるとみていい（専門雑誌が細分化されていて、またやたらと多いのだ）。

出版関係の記事が網羅される「ライブラリー・リテラチャー」。これは一九二二年から出版や図書館などの専門誌二〇〇誌をカバー。たとえば「著作権」の項目をひけば、その年度で「著作権」問題にふれた記事、論文、書籍のタイトルと著書名、雑誌（出版社）名、ページ・ナンバーが出てくる。

あまりに多くて集めるのが大変、となれば、アブストラクト（要約）誌、というのがまたある。ここでは主要論文のアブストラクトが読めるから、たとえばこれにずっと目を通していくだけでも、毎年の論調の大まかな傾向を把握できる。面白そうな記事は、それだけをピックアップして、フルテキスト（本文）を入手すればいい。

それに加わるレビュー・インデックス。一般誌のブックレビュー（書評）、インデックス誌「ブックレビュー・ダイジェスト」が始まったのも一九〇五年。これが今はまた各専門分野独自のインデックスが加わって、人文書

レビュー、科学小説レビュー、映画レビュー、建築レビュー、新製品レビュー、コンピュータ・ソフトウェア・レビュー、……とにかくその分野の作品・製品に関する批評が出れば、それらを全てインデックスする、作品の評価を知りたい時に欠かせない。

これが発展して、戦後、サイテーション（引用）インデックスというのも始まっている。誰が何を引用しているか、そして誰がどこで誰に引用されているかを網羅する。昨年出たある論文が、今年どこで誰に引用されたかをみることもできるし、数世紀前の思想家が、現在どの程度引用されているかを知ることでもある。

個人的定期購読誌に頼る学者は一〜三割？

こうしたインデックスやアブストラクトが、今はみなCD-ROMやオンラインになっている。

その年度毎のインデックス誌を一つずつひもとく必要も、今年の文献探索に次年度のインデックス誌が出版されるまで待つ必要もはやなく、ボタン一つであつという間に、最新の記事まで含んだ文献リストができてあがる。コンピュータ検索は大概、項目と人名の組み合わせや、

キーワードなど縦横の操作を可能としているから、サーチはもちろん、一段とす速く便利になった。

私がコンピュータ検索の威力に心底感動し、このツールを夢中で使い始めたのも、ここ一年のことである。

日本にいた時、何かについて勉強したいと思えば、私はいつも書店の棚の前に立ち、そこで気に入った本を買うことから始めていた。緊急に何か調べる必要が生じれば、うっすらと記憶に残っている雑誌記事や、誰かがどこかで言及していた本やらをとりあえず集め、私の短いアンテナに不運にもひっかからずに漏れ落ちた情報は、さして重要なものではないはずだと無理矢理自分を納得させ、妥協するしかなかった。

ここでは、そういうことがない。

自分にとって全く新しい分野でも、まず図書館に行き、その分野のアブストラクト誌かインデックス誌をひけば、いつでもそこから必要充分な調査がスタートできる。

手元にアメリカのデータがなくて残念だが、イギリスで各分野の学者がどこから情報を得ているか、という広範囲なアンケート調査を行なったことがある（一九七〇年、シェフィールド大学）。次の表はその一部を抜粋し

表 研究に必要な情報をどこから得ているか
(シェフィールド大学, 1970)

	図 書 館 の 雑 誌	アブスト ラ ク ト	レヴュー	個 人 的 情 報 網	個 定 的 期 購 誌
純 粋 科 学	81.7	64.7	28.7	38.0	19.3
テ ク ノ ロ ジー	88.6	78.1	13.3	36.2	14.3
社 会 科 学	82.0	22.9	3.3	64.0	34.4
芸 術 学	88.0	42.6	7.7	65.0	26.5

もののだが、八割以上の学者が図書館の雑誌を重視しているということ、アブストラクトやレヴュー誌も、個人の定期購読誌に劣らず（あるいはそれ以上に）利用されていることなどが目をひく。日本の学者の何パーセントが、図書館の雑誌を読んでいるだろうか。

図書館相互貸借制度

日本だと、雑誌論文はいずれ書籍に収録されて出版、さもなければいつか忘れ去られていく運命、といった感があるが、インデックス誌の発達で、アメリカでは雑誌そのもの

がよく利用される（そして雑誌出版社は著作権を主張し、いったん雑誌に掲載された論文が書籍に収録されるのを原則的に拒否する）。大学図書館の大きな役割の一つは、これら数多い専門誌をキチンと揃えることで、理系だと図書館予算の七〇八割、文系でも四〇五割を雑誌購入にあてるといわれる。

私の通うシモンズ大学が所蔵する図書館情報学関係の専門誌はざっと三五〇。コンピュータからプリント・アウトされたリストを片手に、あっちの雑誌の〇〇論文、こっちの雑誌の××論文、という風を集めていく。図書館の中をあちこち歩き回っていくうちに、自分の調査に必要な文献が、こうしてどんどん積み上げられていく。大抵のものはここで揃うが、もし自分の大学になかったら図書館相互貸借制度（ILL）を利用する。OCLC、RLINといった全国図書館ネットワークは、どここの図書館に何の文献が保存されているかの所在情報を含んでいるから、そのネットワークを使って必要文献を請求する。雑誌記事ならコピーが、書籍なら現物が一〜三週間で届く。

いくつかのインデックス誌は博士論文もカバーしてい

るから、ある博士論文のテーマが自分の興味と一致して
いて読みたい、といった場合も、ILLで借り出せる。
現在は博士論文専門のオンライン・サービスも開始され
ている。

活躍するレファレンス・ライブラリアン

図書館を使うのは、学生や学者だけではない。一般の
人々も、企業も、図書館の重要性を熟知している。アメ
リカ専門図書館協会の名簿をめくると、アメリカの大手
企業のほとんどが社内に図書館をもち、専門の図書館員
を雇い、必要文献とコンピュータ・ターミナルを揃えて
調査に利用していることが判る。

今回はインデックス誌の話に限ったが、アメリカの情
報収集ツール——これらをレファレンスと呼ぶ——の多
様なことといったら、とてもここには書ききれない。私
が始めて、図書館を学ぶ学生がマスターしなければなら
ない基本レファレンス六〇〇種類のリストを見せられた
時は、その量と種類の多さと歴史の長さに息をのみ、気
が遠くなりそうだった。これらを駆使して検索すれば、
出てこない情報などないだろうとさえ思えた。

こうしてトレーニングを受けたレファレンス・ライブラ
リアンたちが、全国の公共図書館、大学図書館、企業
図書館に散らばり、情報サーチャーとして活躍している。
ボストンにある教科書会社の老舗、ホートン・ミフリ
ン社。そこで働く六人のライブラリアン。

「トラの横編は座った時、どんなふうになるかな」
「ターザンの友だちのサル、なんて名前だったけ」「なぜフ
ラミンゴがピンク色なのか調べてくれない」「左ききの
女性有名人って誰かいらないかな」。人は実に気楽に図書
館を訪れ、あるいは電話をかけてくる。教科書に載る情
報だから、正確を要する。間違えたら訴訟にもなりかね
ない。神経をつかうけど、楽しいわよ、と図書館員の一
人が言う。

各種雑誌を発行するタイムライフ社。各雑誌編集部に
それぞれ図書館をもつが、何といってもすごいのが「タ
イム」図書館で、八六人のフルタイム・ライブラリアン
が働いている。人物の情報ファイル一五〇万、企業ファ
イル七〇〇〇、テーマ別ファイル五〇万件。世界各地に
散らばる「タイム」の記者が、電話やFAXで問合せて
くる。ある人物や団体などの個別具体情報についての問

合せと、その地域や運動の歴史的バックラウンドに関する問合せとが半々。「アイツラいつだって急いでいるんだから、こっちもできるだけ速く必要情報を集めてFAXで送ってやらなくっちゃ、催促がくるよ」。別の図書館員が頷いて笑う。

ベンジャミン・フランクリンが、仲間と本を持ちよって、フラデルフィアに世界初の共同文庫を開いたのが一七三二年。物資不足の中で、その後の独立戦争、建国を支える合衆国の理念を醸成し、統一的基盤を固めていった重要な時期を、またたく間に全国の知識層の間に何百何千と拡がっていったこの共同文庫（図書館）運動が、陰で支えていたのだという話をどこかで読んだことがある。

栄光の時代がすぎ、今や問題と苦汁を山積させるアメリカだが、この国はまだどこかで図書館に支えられている、と思うことがある。

豊田 恭子（とよだ・きょうこ）

出版業界紙「新文化」元記者。一九八七年夏、退職、渡米。現在シモンズ大学図書館情報学修士過程（ポスツン在住）。

弘報委員会より

○人文会の活動年度は、五月より翌年四月までとなっております。先月十七日、年次総会を開催し、今年度の体制を決定いたしました。

○まず、ご報告申し上げますことは、相田良雄氏（みずす書房）が代表幹事を退任され、会長に就任されたことです。後任の代表幹事には、筑摩書房の菊池明郎氏が就任されました。

○新しく「特約店委員会」を設け、小会の特約店制度について検討していきます。

○各委員会は、新年度の活動目標を立て、新たな気持ちで取り組んでまいりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます（委員会の構成につきましては、巻末の名簿をご覧ください）。

代表幹事退任の辞

みすず書房

相田 良雄

人文会創立以来二十数年、取次店の皆様・書店の皆様から多くのご指導を頂き、ご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

人文会と歩んで参りました二十数年は、私にとっても青春の二十数年でございました。昭和四十二年春から「みすず書房」は新刊配本を書店の申込みによる委託配本に切りかえました。劃期的ともいえる此の制度を軌道にのせるには数年を要しましたが、現在でもこの考え方は正しかったと自負しております。

その翌年に、中平氏・別所氏と会合をもち、今、書店の人文書の棚を確保しなければ、棚がなくなってしまうのではないかと危惧致しました。人文書であっても売れるものは売れるのだ、ということを書店に理解して貰うべきだと考え、人文系出版社十三社に呼びかけました。東販とタイアップして、人文書特選セットの送付を企画し、書店・読者に大いに喜ばれました。その結果発表時に、セット展示を今後も続けるべく、そのためには会を結成するべきだという意見が多くでました。

昭和四十三年暮、十五社の賛同を得て、ここに人文会の発足が実現致しました。

各社の営業の考え方を議論すべく、研修旅行を企画し、第一回は京都・大阪でした。その折、微力ながら旅行幹事をつとめたことなど、思い出は一杯でございます。

私は発足時、会計幹事を受持ちました。数年後、各社が各地でのおの独自の常備店をもっていることが判明致しました。ご承知の通り、人文書はある程度の量がなければ読者を誘因できません。そのためには各社の常備店を集約すべきだと考え、人文会特約店をつくるための特約店委員長をつとめました。

ついで、人文会は何を考え、何を仕事としているのか、を取次・書店に知らせることを必要を痛感いたし、「人文会ニュース」の発行を企画して弘報委員長をつとめました。

その後、中平氏の退任により昭和五十二年より代表幹事をつとめて参りました。

顧みますと、昭和二十年代後半に若葉会に入会いたしましたして、松木善信氏はじめ多くの先輩から販売についてのご教示を賜りました。ついで三十年代後半に、書協の図書館委員や、若葉会の会長をつとめました時には、会の運営を如何にすべきかと、多くの友人たちから教えられました。その積み重ねが、代表幹事として役立てることが出来たら、幸いであると考えて参りましたが、如何でしたでしょうか。

私も本年六十三歳になり「みすず書房」の役員を退任いたすことになりました。後進に道をゆずる良い機会と、人文会代表幹事も退任いたす決心を致しました。

近年、書店の人文書の棚は縮少しつつあるようでございます。一社では出来ないことも人文会として二十数社結集すれば、出来ることはまだまだ沢山あるし、そのことが読者のニーズにこたえることになると存じます。

今後は、次期代表幹事、筑摩書房の菊池氏が、私の気づかなかった面を開発され、より

良く会を運営してくださることと存じます。

私にご声援くださいました以上に、菊池氏を中心とした人文会に、ぜひご支援・ご鞭撻を賜りまして、人文会がますます発展するようお願い申し上げます。

取次店・書店をはじめ、加盟出版社の多年のご支援・ご協力、有難うございました。

代表幹事をお引き受け するにあたって

筑摩書房 菊池明郎

去る五月十七日に開催された第二十三回人文会年次総会において、私が代表幹事に選出されました。創立以来のメンバーがこの度会長に就任された、みず書房の相田さんを除くと誰一人いないという中で、古参の一人でありながら比較的若くて使いやすいという理由で選ばれたのだと思います。相田代表幹事時代と同様よろしくお願い申し上げます。

人文会二十年余の歴史を振り返ってみますと、苦闘の連続だったようです。発足当初は書店さんの店頭で人文書の棚を確保するのが最大の目標でした。もともとが地味な性格の

人文書の場合、世間の好不況にかかわらず販売する上で苦勞がつきまといます。一時人文書ジャンルではニューアカデミズムがもてはやされましたが、基本的にはこういうブームとはあまり縁のない分野です。

書店さんにとっては、著者や出版社が馴染みにくい、展示するにも分類がしにくい、分類の基礎である学問の流れも分からない。その上、手間がかかるわりに利益が少ない。いわば、ないないづくしの代表のような存在でした。長年にわたって人文会が取り組んできた諸活動は、このないないづくしを何とかすることだったと言っても過言ではないでしょう。人文書セット、人文会ニュース、新刊案内（現在は新刊一覽）、ワンポイント情報、全国各地へ研修旅行に行き話し合いをすること等、これらすべてが人文書を何とか売り伸ばすためのものでした。こうした努力の結果、人文書も店頭で定位置を確保できるようになりました。

しかし、これからの時代は、ニューメディアを筆頭とする他のメディアとの競合と共存を真剣に考えなければなりません。このような時代を迎えた人文会は、二十周年記念として『人文科学の現在』を出版し、業界の枠をこえた多くの方々から評価を頂戴しました。今後はこうした成果を踏まえた活動が求められていると考えます。

さらに、ここ数年特約店さんの一部と実施して好評だった研修会をもう少し拡大したいと思います。同時に、特約店制度のありかたを現代にマッチしたものにするために、集中的にそのことを考える特約店委員会を新設致しました。

最後に、私に課せられた使命は、これまでの二十年余の人文会の実績を基に一步でも前進することだと考えます。何卒、ご支援ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1990. 6. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	平石 修	102	千代田区九段北 1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	439-0128	439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	814-6861	814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	813-8105	813-9061
	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	255-9611	253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	255-4501	255-4506
幹 事	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	946-5666	945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	269-1051	269-1092
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	811-8814	812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	987-8621	987-8590
幹 事	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	813-3981	818-2786
幹 事	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	265-0455	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
会 長	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	814-0131	818-6435
	"	持谷 寿夫	"	"	814-0131	818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	814-5521	814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	262-3231	262-6938
幹 事	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎辻村 ○重光 古川 氏家 竹内 阿部

弘報委員会 ◎土屋 ○平石 原田 佐久間 西谷

調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田

特約店委員会 ◎萬洲 ○市川 持谷

サイエンスの面白さを再発見／

科学選書

③ 生物学のすすめ

メイナード＝スミス／木村武二訳 現代生物学のエッセンスをかみくだいて解説した格好の入門書。■1700円(税込)

① 数学 7日間の旅

志賀浩二 和歌や俳句をまじえて、数学的世界観が自然と身につき、楽しい旅に招待。■1800円(税込)

② スーパースtring

デイヴィス、他編／出口修至訳 宇宙の万物を説明するとして、いま注目の理論を紹介■2000円(税込)

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
ご注文は ☎ 03-439-0128へ

銀の糸 結ぶとき

写真＝田邊順一／文＝浜文子

老いの世界に付き添う写真家と詩人がつむぎあげたぬくもりのある本。この本を開くと、さまざまな想い出があなたを包むでしょう。菊判変型・2300円

ルポルタージュは
世界を動かす

松浦総三他著

ジョン・リードから現代へ

ルポルタージュのフロンティア＝リードからなにを学ぶか。A5判・1600円

ベルリン1989

東ドイツの民主化を記録する会編

草の根の革命をよびかけた勇気ある人々の証言や手紙が感動的に語る苦悩と希望のドキュメント。A5判・1550円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話 03 (813)4651(代表)

尼ヶ崎 彬
ことばと身体

ことばの意味の発生と応用＝レトリックの仕組に迫る。2060円＋税260

江原由美子編
フェミニズム論争

70年代から90年代へ この20年を総括、90年代を展望。2266円＋税260

今村仁司
理性と権力

生産主義的理性批判の試み 排除の論理を解明する。2369円＋税260

G.マクラッケン／小池和子訳
文化と消費とシンボルと

社会におけるヒト－モノ関係への鮮烈な新アプローチ。3914円＋税310

* 定価は消費税込みです。

東京文京 後楽2-23 勁草書房 5-175253

地球上の
すべての女たちのために

わたしたちの
アリス・ウォーカー

河地和子編著 ￥3502

『カラー・パブリ』でピュリッツァー賞を受賞した世界でもっとも注目される女性作家 黒人民族としての歴史の重さは真摯で強固な主張と鋭い現実社会批判の眼を育んだ。その全作品と思想の全貌を紹介する初の作家論 [著訳者]河地和子／風呂本淳子／落合恵子／A・ノヴィック／吉田ルイ子 金和美／チカupp美恵子／藤平育子

御茶の水書房

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2

モノ誕生

「いまの生活」 1960-1990

日本人の暮らしを変えた133のモノと提案
水牛くらぶ編集 即席ラーメンからワ
ープロまで。「いま」を変えた商品は
いつ誰の手で作られたか? なまの資料
が語る現代日本人の生活史。 5900円

ヨーロッパの理解

ホガート、ジョンソン 大島真木訳
独、仏、英の三大国を中心に、政治・
社会・文化を一望のもとに解説。ヨー
ロッパ理解に絶好の入門書。 1860円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

原発をとめる女たち・ネットワークの現場から
三輪妙子・大沢統子編 丸木俊など10人が執筆 ●一九〇〇円
ナチズムの終焉・キツユと死についての考察
S・フリードレンダー著 田中正人訳……………●二〇〇〇円
アイ・ラブ・カナダ・わたしの移住日記
猪俣満子著 いきいきシルバライフ……………●一五〇〇円
大号令!「現役合格」・高校教育を問う
熊本日新聞政経部編 進学校の現場を検証……………●一八〇〇円
灰谷健次郎アクショントーク 書下ろし異色対談
わたしの子ども時代・青春時代 集。●一三〇〇円

社会思想社

東京都文京区本郷3-25 Tel. 03-813-8105

カウンセリング辞典

国分康孝編

カウンセリングの基本概念をわかり
やすく解説したわが国初の辞典。専
門のカウンセラーばかりではなく、
教師・ナース・弁護士など多くの人々
の実践に役立つ辞典。 3900円

からだに聞いて ところを調える

だれにでも今すぐできる瞑想の本

J. ポリセンコ/伊東 博訳 破滅
的なストレスに直面している現代人
への興味深い実践手引書。 2500円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-946-5666

愛と非暴力
——ダライ・ラマ仏教講演集——
ノーベル平和賞受賞 ダライ・ラマ14世
社会の変革は心の変革から始まる。チベット仏教思
想の真髓や実践法を語る。三浦順子訳 1800円
◆ヘンドリックス他 手塚郁恵訳/吉福伸彦解説
心も体もリラックス 活力が湧いてくる。1600円
セクタリング・ブック

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区 春秋社 ☎(03)255-9611
外神田2-18-6 振替東京8-24861

あなたにあった大学院進学・編入学

クロス学歴のすすめ

安井みずず

ストリートに高校から大学、大学院へと進むのもいいが、途中社会人を経験し、再び学問の道に戻るのもいい。社会人や他大学・他学部出身者を広く受け入れる大学院、また学部編入学の方法を示唆。

◇1500円(税込)

創元社

大阪市北区西天満1丁目4-2 ☎06-363-2531
東京都新宿区山吹町334-11 ☎03-269-1051

高橋康夫・吉田伸之編

B5判・各三九一四円(税込)

日本都市史入門 全3巻完結!

I 空間

中世・近世の〈都市空間〉を構成するさまざまなレベルや諸要素、それらを編成する原理をとりあげる。

II 町

中世から近世初頭までの都市の基礎的単位であった町(チヨウ)に着目し、その生成・展開・解体の歴史を検討。

III 人

中世・近世の都市的な場における人間の様々な存在形態をとりあげ、〈前世的市民〉の諸相を具体的に描く。

東京大学出版会

気配の時代 山口昌男

時代の表層に浮びあがる気配を敏感に察知し、新人類、M事件、昭和天皇・美空ひばりの死などを読むとどうなるか?

2270円(税込)

中世演劇の 社会史

グリーン・ウィッカム 山本浩訳

独自の面白さがいま注目されているヨーロッパ中世演劇の起源と展開を社会の視点から描く。3500円(税込)

東京台東 筑摩書房 蔵前2-6-4

◎ベルリンの壁から、38度線へ

朝鮮が 統一する日

河信基／著

定価1400円

朝鮮が統一する——人は信するだろうか。これは単なる願望ではなく、現実の動きである。経済不振、軍事費負担に耐えかねる北、反米ナショナリズムに燃える南。深く静かに進む分断国家・朝鮮の統一への歩みを実証する。

日本評論社

〒170 豊島区南大塚 3-10-10

アルバート街の子供たち 1:2
ルイバコフ スターリンの犯罪を描き20年間発禁の書ついに刊行。ペレストロイカの文学的象徴。長島七穂訳 各三六〇円

エイズとその隠喩
ソクタギ 現代最大の脅威「エイズ」をめぐる隠微のヴェールを剥ぎ、病の核心にメスを入れる。富山太佳夫訳 二四〇円

冗談
クンデラ 自由、民族、社会主義とは？主人公の冗談が生んだ波紋を描いたチエコ文学の傑作。関根・中村訳 三六〇円

バルザック論
クルティウス ダンテ以来最大の幻想・人間喜劇を精細に分析し、巨大な幻視家の全体を照射する。小竹隆英訳 四四〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

■好評発売中■

日高敏隆著 四六判／一五〇〇円

動物人物 動物のなかにいる人間

人間を頂点として序列化化する近代主義の動物観に疑義をとなえる著者ならではのウイットに富んだエッセイ集。

莊嚴舜哉・根ヶ山光一編著

行動の発達を科学する

エソロジーの成果をもとりにれた新しい発達心理学。 A5判／二六〇〇円

東京・文京
小石川1-3

福村出版 電話(03) 813-3981

* 定価は税込 *

コリア研究所編訳

消された言論

日本統治下の『東亜日報』・『朝鮮日報』押収記事集

日本帝国主義は三・一独立運動が生み出した民族紙の抹殺を謀った。ここに復元される言論弾圧の記録は朝鮮民族の不屈の精神の歴史的証言であり、現代の日本人に言論のあり方を改めて問う質するものである。社会篇Ⅱ8月刊

定価5974円(本体5800円・税174円)

〈全2巻〉

政治篇

未来社

東京都文京区小石川3-7-2
電話(03)814-5521 〒112

法政大学出版局

もうひとつの
ロマンチック街道

藤代幸一 抑制のきいたユーモア
と文明批評精神あふれる手づくりの旅の記録。有名な町々のゆたかな歴史、語らう。1957円

写真論

ブルデュ一監修 《写真を実践する
ることの多様性・曖昧さ・流動
性に着目し、様々な階層に特有の文化の体系を明らかにした写真の社会学。山藤照・直子訳 3914円

日本芸能史7

芸能史研究会編 伝統芸能の脱皮
と変革、近代芸能の自立と抵抗を
軸に、近代芸能史の百年の歩み
概観し、芸能史研究の課題に及ぶ
⑦2781円／全7巻セット17,098円

東京千代田区富士見2 ②237-1731
表示価格は税込みです

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印

非
売
品